慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マムルーク朝後期の人名録にみるウラマーの「悪評」： 「記録」の選択から「記憶」としての共有へ
Sub Title	The "notoriety" of the 'ulamā' in the biographical descriptions of the late Mamluk Dynasty : from the selection of "records" to their sharing as "memory"
Author	太田 (塚田), 絵里奈(Ota-Tsukada, Erina)
Publisher	三田史学会
Publication year	2024
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.92, No.4 (2024. 3) ,p.87 (349)- 109 (371)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 中近世ウラマー研究の現在I
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20240300-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マムルーク朝後期の人名録にみるウラマーの「悪評」

――「記録」の選択から「記憶」としての共有へ――

太田（塚田）絵里奈

一　はじめに

一三世紀中葉から一六世紀初頭にかけ、エジプト、歴史的シリア、ヒジャーズ地方を中心とするアラブ諸地域を支配したマムルーク朝（一二五〇～一五一七年）は、前近代期のアラブ史研究において、叙述史料の豊かな時代としても知られる[1]。とりわけこの時期に数多く編纂された人名録（名士伝記集）は、ウラマー（イスラーム的知識人）に関する伝記を核としているものの、スルターンをはじめとする有力軍人、官僚、商人及びその近親者、配偶者など、王朝の支配層とその周縁部を構成する人々の来歴を知るうえでも不可欠の史料である。

これまでも当該時期に活躍した著名なウラマーの経歴、あるいは師弟や家系・婚姻関係に基づく系譜の再構成などの視点から、人名録に基づいた研究がなされてきた[2]。ウラマーの伝記は、収録対象者の生没年のほか、師、修得したテキスト・学問分野の情報などの学歴に続き、職歴が列挙され、さながら履歴書のような体裁である。人物評についても、「高潔」「敬虔」「寛大」などの、あるべきムスリムとしての美質を称賛する形容詞が並べられるにとどまり、一般に、具体的な人柄や家庭生活などの私的側面まで踏み込む例は少ない[3]。前近代期のアラビア語伝記文学を概観した谷口淳一氏は、「伝記集に収められた伝記では…［中略］情報が淡々と列記されているだけである。その人物の人格や人物像については、「正直」「有徳」「嘘つき」といった単語が並ぶだけで、具体

的、立体的に描かれることはまずない」と評する。(4)

そもそも、アラブ史研究において中心史料に位置付けられる人名録は、いかなる意図で編纂されたのだろうか。マムルーク朝期の人名録のなかで最も大部なものは、ヒジュラ暦九／一五世紀を対象としたサハーウィー al-Sakhāwī（八三一～九〇二／一四二七～一四九七年）の『九世紀の人々の輝く光 *al-Ḍaw' al-Lāmi' li Ahl al-Qarn al-Tāsi'*』（『輝く光』）である。『輝く光』は約一二、〇〇〇人分という圧倒的な伝記数と広範な収録対象を誇ることで、一五世紀の最重要史料の一つに数えられるが、執筆の動機と経緯については、著者の師であるイブン・ハジャル・アル＝アスカラーニー Ibn Ḥajar al-'Asqalānī（七七三～八五二／一三七二～一四四九年）の人名録『八世紀の名士における隠れた真珠 *al-Durar al-Kāmina fī A'yān al-Mi'a al-Thāmina*』の続編であること以外、その序文からはうかがい知ることはできない。(5)

アラビア語人名録編纂の動機については、人物情報収集の必要性をハディース学の伝承経路（イスナード）に基づく学統と関連付けることで説明されてきた。(6) 加えて近年では、ウラマーの人名録が共同体意識の形成において果たした役割が注目されている。(7) 例えば、マムルーク朝期における叙述史料の史実性を議論するなかで、グディは人名録に収載されること自体が、ウラマーのコミュニティ内に自己を位置付ける手段であったと述べる。(8)

この指摘は、人名録に編纂者自身の長大な伝記が収録され、また他者の記事において自伝的記述が分散的に挿入されることによっても裏付けられる。『輝く光』に含まれるサハーウィー自身の伝記も、学者としての経歴以上に、いかなる人物と師弟関係を結び、免状を獲得したか、さらにはいかに多くの著名学者から賛辞が寄せられているかを例証することに紙幅が割かれているのである。(9)

したがって、人名録を編纂する行為は、学者として必須の素養であるハディース学と深く結びつき、預言者に遡及する伝承の系譜を次世代へと伸張する、垂直方向の時間軸における営みの上に、学者コミュニティ内に自他を位置付けるという同時代の社会的関係が複層的に重なる構造を取っているといえる。

『輝く光』が編纂されたのは一五世紀の末である。(10) 刮目に値するのは、このマムルーク朝後期の人物を伝える重要な記録が、無味乾燥な定型情報のみで構成されているわけではないという点である。『輝く光』の史料的価値は広く認知されていながらも、前述の通り、その編纂

意図や伝記対象の選択については、サハーウィー自身の述懐が乏しいこともあり、十分に焦点が当てられてこなかった。定型情報のあいだに挿入される、同時代の名士に対する動的な記述を拾い上げ、著者が同時代社会をいかに描こうとしたかを検証することで、ウラマー研究に新たな視座を提供することが本稿の目的である。

以下では、『輝く光』にみえる同時代ウラマーの「ネガティブ」な記述である「悪評」を手掛かりとし、著者サハーウィーと「悪評」の対象者を取り巻く社会上層部の諸関係について、別の同時代史家の手になる記述に即して考察する。収録対象者のキャリアや著者自身の人的ネットワークの精査を通じて、記述内容における主観性を検証することは、著名ウラマーのプロソポグラフィーのみならず、史料ジャンルとしての人名録研究に資する側面も少なからずあると思われる[11]。本稿では、サハーウィーの人物記述に対する選択と恣意性を明らかにする作業から、一五世紀のウラマー・コミュニティにおいて、人名録とそれを編纂する行為の持ちえた社会的含意を探ることにしたい。

二　『輝く光』にみえる「悪評」

『輝く光』における「悪評」のなかで管見の限り最も辛辣なのが、クルアーン注釈学者として名高いビカーイー Burhān al-Dīn Ibrāhīm al-Biqāʿī（八〇九～八八五／一四〇七～一四八〇年）の伝記である。学者としてのビカーイーは、スルターン・カーイトバーイ期（在位一四六八～一四九五年）に生じたスーフィー詩人イブン・アル＝ファーリド Ibn al-Fāriḍ（六三二／一二三五年没）をめぐる神学論争（八七五／一四七〇―七一年、八七七／一四七二―七三年、八八八／一四八三―八四年）の論客として有名であるが、近年、ヘブライ語聖書を駆使したクルアーン注釈など、ビカーイーの著述活動に関する研究が大きく進展し、一五世紀を代表する法学者・クルアーン注釈学者の一人であったことが立証されている[12]。それに加え、ビカーイーは従軍経験を有し[13]、自身の私生活にも踏み込んだ、独自性の高い歴史叙述も残している[14]。八四八／一四四四年には、当時大ダワーダールの地位にあった、のちのスルターン・イーナール（在位一四五三～一四六〇年）のロードス島遠征に帯同した[15]。この遠征をきっかけにイーナールとの親しい関係を築いたことが、

彼の治世においてビカーイーがザーヒリーヤ・モスクal-Ẓāhiriyya のクルアーン注釈者職などを得たことにつながったと考えられる[16]。だが学界における要職を得たのはイーナールの治世までで、イブン・アル＝ファーリド論争に敗れた後は不遇の生涯を送った。

『輝く光』のビカーイー伝は一五世紀末（八九七／一四九一―九二年）の写本で一〇葉（Ma'had al-Makhṭūṭāt al-'Arabiyya, Tārikh 1119/1, fol. 40–44, 原本は Maktaba al-Nāṣiriyya（Lucknow, India）蔵）[17]、校訂本で一〇頁に及んでおり[18]、同著作におけるウラマーの伝記が平均して一～二頁に収められることに鑑みれば、記述量は相当に多いといえる。だがその豊富な記述の大半が彼をめぐる「悪評」で占められていることに注意を払っておきたい。ビカーイー伝は、彼のイスム（名）、ナサブ（由来名）が並べられたのち、「一連の驚嘆 'ajā'ib、災難 nawā'ib、動揺 qalāqil、問題 masā'il、対立 muta'āriḍa と矛盾 mutanāqida をもたらした張本人である」という異例の書き出しから始まる[19]。通常のウラマーの伝記であれば、この後に「披露」（'ard テキストの暗唱発表）[20]や初等教育に関する情報が述べられ、高名な師を求めてのアラブ諸都市への遊学など、学問遍歴に関する記述が続く。しかしこのビカーイー伝においては、彼の学業や職歴に関する言及のたびに、本来修めるべきイスラーム諸学を学ぶことなく、他の学問に専心する様が描かれる。その学業が未熟であるにもかかわらず、尊大で驕り高ぶり、内面においてスンナに背いているなど、否定的な記述がその都度挿入されるのである。たとえばカイロのムアイヤディーヤ学院 al-Mu'ayyadiyya におけるクルアーン読誦学の教授就任については、「彼には全く相応しくないこと」の一つで、「この分野で無名であったビカーイーが抜擢されたことを、当時の人々は訝しく思った」という一文が付け加えられている[21]。サハーウィーいわく、「我々が注意を払うべき彼の著作は何一つなく」[22]、「彼を知らない人々にとっては信心深く見えるが、彼を知る人々は自らに危害が及ぶことを恐れていた」[23]。これだけでもビカーイー伝が通常の伝記記述と大きく趣を異にしていることが分かる。

学歴に関しては、彼の未熟さが、多くのウラマーによる「証言」の形態をとって記述されている。その人格についても、「ビカーイーは、彼に恩を与えた人物ですら詩や散文で批判し、敬意を払うべき人物を軽んじており」[24]、「彼がただ一つやりたかったことは、指導的立場に

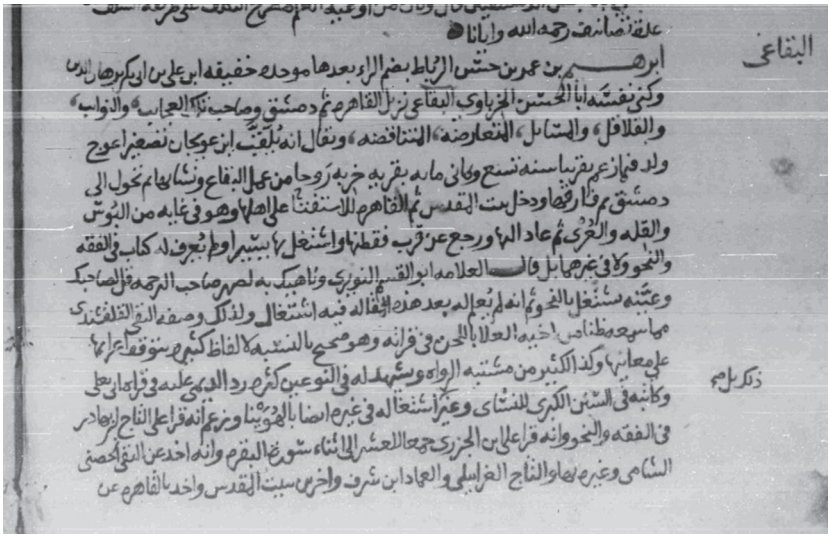


図1　『輝く光』ビカーイー伝の冒頭部分
（Ma'had al-Makhṭūṭāt al-'Arabiyya, Tārikh 1119/1, fol. 40, originally from Maktaba al-Nāṣiriyya, Lucknow, India）

あるウラマーの見解に逆らうことであった」と、道徳心や先達者に対する敬意が欠如する様を表現する。[25] それに重ねて、「汚らしい衣服に醜い髭をたくわえ…［中略］なぜ彼の風貌がこれほど醜悪なのかといえば、約束を守ったためしがないからである」と、彼の容姿までも酷評しているのである。[26]

八八〇／一四七五年、イブン・アル＝ファーリド論争に敗れたビカーイーは、ダマスクスに居を移し、困窮生活を送ることとなった。さらに驚くべきは、ビカーイーが、当時の有力官僚であったザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒル Zayn al-Dīn Abū Bakr ibn Muhammad ibn Muzhir（八三一～八九三／一四二八～一四八八年）に対し、現地ウラマーとの関係を取り持ち、保護を求めた書簡の全文までもが、『輝く光』のビカーイー伝に収録されている点である。[27] 窮状を訴えるビカーイーの書簡の引用を終えるにあたり、サハーウィーは「これを見て仰天するがいい。そこに数多の嘘が散りばめられていることが分かるだろう」と、その内容が専ら偽りであると断じている。[28]

『輝く光』におけるビカーイー伝は、人名録としての体裁を維持しながらも、著書、書簡、伝聞、引用など、

あらゆる素材と手段を用いて、彼を貶める目的で挿入されたと考えざるを得ない。実にその伝記の大半が、ビカーイーの冒した「誤謬」の指摘や道徳心に欠けるエピソードの具体例で構成されているのである。

それでは、サハーウィーが伝記記述によってビカーイーを貶めることに、いかなる意味があったのだろうか。翻ってみれば、ビカーイーを人名録の収録対象から除外することで同時代の学界や学統から排除するのではなく、ビカーイーの私的書簡や多くのウラマーの証言を丹念に集め、その悪行と「悪評」を学者コミュニティの「記録」としてつぶさに残したという事実こそ、サハーウィーが彼にひとかたならぬ関心を抱いていたことの表れともいえる。『輝く光』を通じてビカーイーの名は四五八回も言及されており、ビカーイーの師弟に関する伝記のほか、彼の著述、言及を典拠とした人物記述も枚挙にいとまがない[29]。

ビカーイーとサハーウィーは、ともにイブン・ハジャルの高弟であった[30]。サハーウィーは、自身が門下生のなかでもとりわけ厚遇されていたことを自伝で述べているが、イブン・ハジャルはビカーイーに対しても格別の待遇を与えていた。サイラフィー Nūr al-Dīn ʿAlī al-Jawharī al-Ṣayrafī（九〇〇／一四九五年没）によれば、イブン・ハジャルはビカーイーのクルアーン読誦と雄弁さを賞賛しており、彼の地位を上昇させたという[31]。事実、八四二／一四三八年、ビカーイーがカイロ城 Qalʿa al-Jabal におけるスルターン・ジャクマク（在位一四三八～一四五三年）のハディース教師に就任した際、他のウラマーから疑義が呈されたが、イブン・ハジャルはその任命を正当なものとしてビカーイーを擁護した[32]。『ブハーリー注解 *Fatḥ al-Bārī*』を完成させ、当代随一のハディース学者としての名声を確立していたヒジュラ暦八四〇年代のイブン・ハジャルは、両者以外にも多くの門下生を抱え、大カーディーの地位に付随する様々な職を彼らに斡旋していたと思われる。

またサハーウィーは、ビカーイーがクルアーンの注釈に聖書を用いたことに反駁する論文を記しているほか[33]、ヒジュラ暦八七四年から八七五年にかけて生じた、イブン・アル＝ファーリドをめぐる論争で、相対する立場をとった[34]。だが、イブン・アル＝ファーリド論争で対立関係にあったウラマーについて、サハーウィーは必ずしも批判的伝記を残してはいない。例えば反対派の領袖であったムヒッブ・アッ＝ディーン・イブン・アッ＝シフナ

Muḥibb al-Dīn Muḥammad ibn al-Shiḥna（八九〇／一四八五年没）とその息子アブドゥル＝バッル Sarī al-Dīn ʿAbd al-Barr（八五一～九二二／一四四八～一五一五年）、同じく反対を表明したイブン・イマーム・アル＝カーミリーヤ（後述）について、サハーウィーはその学識や人格、善行を好意的に評価しているのである[35]。

したがって、同門としての競合や学理をめぐる対立のみが、記述の公平性を著しく歪ませたと結論付けるのは早計であろう。考慮に入れなければならないのは、サハーウィーがいかなる情報を次世代に残そうとしたかという、「垂直方向」の営みとしての、人名録執筆の意図である。同じくイブン・ハジャル門下でもあったサイラフィーが残したカーイトバーイ期の年代記（『時代の息子たちに関する獅子の通知 *Inbāʾ al-Hayṣ bi-Abnāʾ al-ʿAṣr*』）には、サハーウィーが語らないビカーイーとの確執について言及がある。続く章では、サイラフィーの記述をもとに、サハーウィーが残そうとしなかった事件を追うことにしよう。

三　カーミリーヤ学院のハディース教授職をめぐる対立

（一）事件の概要

それは八七五年ズー・アル＝カアダ月／一四七一年四月に生じた、カーミリーヤ学院 al-Madrasa al-Kāmiliyya でのハディース教授職就任をめぐる混乱である。サイラフィーによれば、ことの経緯は以下の通りである[36]。

八七五年ズー・アル＝カアダ月三日／一四七一年四月二三日、サハーウィーはハディース学教授として初めて教鞭を執るために、同マドラサに向かった。その職は、前任者であるカマール・アッ＝ディーン・イブン・イマーム・アル＝カーミリーヤ Kamāl al-Dīn Muḥammad ibn Imām al-Kāmiliyya（八〇八～八七四／一四〇六～一四七〇年[37]）の死去を受けて彼が獲得したものであったが、就任をめぐり、前任者の息子との間に争いが生じていた。その息子を支持していたのはムフタスィブ（muḥtasib 市場監督官）のヤシュバク・アル＝ジャマーリー Yashbak al-Jamālī（九〇一／一四九五年没）、スルターンの義父アラー・アッ＝ディーン・イブン・ハーッス・バク ʿAlāʾ al-Dīn ʿAlī ibn Khāṣṣ Bak（八九九／一四九四年没[38]）、

イブン・ハーッス・バクの息子の従者で、前任者と学的交流もあったアンバル（ジャウハル）・アル＝ムイーニー・Anbar（Jawhar）al-Muʿīnī[39]ら、有力軍人及びスルターンの妻ファーティマ Fāṭima ibna ibn Khāṣṣ Bak（九〇九／一五〇四年没）に近しい人物であり[40]、カーイトバーイのもとでサハーウィーの就任を阻止するための働きかけを繰り返し行なっていた。

その日、貴顕たちから成る一団はすでにマドラサでサハーウィーの到着を待っていた。しかし、彼がその門に至ると、侍従長（ḥājib）の地位にあったタムル Tamur min Maḥmūd Shāh（八八〇／一四七五年没）[41]の吏員らがサハーウィーを捕らえた。そしてサハーウィーがマドラサに入ると、護衛長（raʾs nawba）のイブン・アズバク Ibn Azbak が、椅子に着座しているタムルの下にサハーウィーを立たせようとしたので、サハーウィーはこれを拒否し、進み出て隣のベンチに座り、「文書庁長官（kātib al-sirr）は私が本日教鞭を執る許可をスルターンから得ている」と主張した。

これに対してタムルはスルターンに再度諮る旨を伝えたが、納得のいかないサハーウィーは「自らの意図を実行に移す」、すなわちハディースの講義を始めるために立ち上がったため、タムルの配下たちは、タムルの邸宅のある横丁のモスクに彼を連行して座らせた。

この新たな場での講義に出席しようと人々が参集したため、サハーウィーは彼らにことの次第を聞かせた。この騒ぎはハナフィー派の有力学者アムシャーティー Shams al-Dīn al-Amshāṭī（八一一～八八五／一四〇九～一四八〇年）の耳に届いた[42]。そこで彼はタムルのもとへ行き、「シャイフ・シャムス・アッ＝ディーン（サハーウィー）は知に属する者の一人で、スンナの僕である」と抗議した。タムルは、一連の行為は自身に対する勅令（marsūm）に基づくものであると弁明した。

そのモスクには、前任者であるイブン・イマーム・カーミリーヤの息子と、彼を支持していたビカーイーの一派（jamāʿa）も集まっており、その中心はビカーイーのもとで学んでいたカルキーリー Najm al-Dīn Muḥammad al-Qalqīlī（生没年不明）[43]と、イブン・ラウク（ラワク）Sharaf al-Dīn Muḥammad ibn Rawq（Rawaq）（八五〇／一四四六年生）[44]であった。カルキーリーは着座しかけたサハーウィーをその場から排除しようとした。タムルは、彼をサハーウィーの傍らに座らせることしかできなかった。人々はサハーウィーを支持する側と、イ

ブン・イマーム・カーミリーヤの息子を支持する側に分かれ、思うままに発言をした。そしてサハーウィーに対する一連の仕打ちが仮にスルターンの命によるものとしても、翌日に再度スルターンに諮るよう、タムルに詰め寄ったという。

サイラフィーの記述はこのサハーウィー派と前任者の息子派の争いで終わり、この事件がいかなる経緯で決着したかは詳らかでない。だが、『輝く光』におけるイブン・イマーム・カーミリーヤの息子アブドゥッラフマーン Zayn al-Dīn ʿAbd al-Raḥmān の伝記には、「ジャウハル・アル＝ムイーニーが彼のために、カーミリーヤ学院のシャイフ職（mashyakha）を、法的に権利を有する者［サハーウィー自身］から奪い取った」と記されていることから、同職は前任者の息子の手に渡る結果となった(45)。

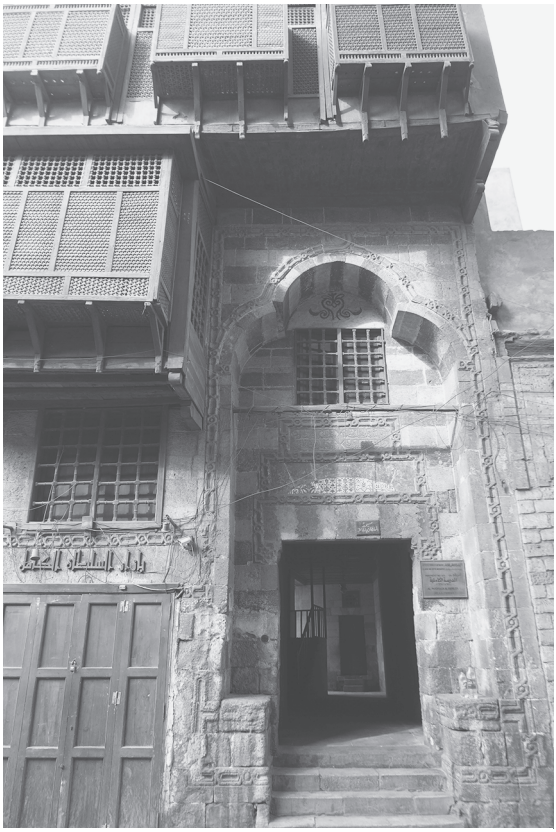


図2　カイロのカーミリーヤ学院
（©東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター）

（二）事件の舞台と関係者

まずは事件の舞台となったカーミリーヤ学院について、当時の状況を踏まえておく必要がある。カーミリーヤ学院はアイユーブ朝のスルターン・カーミル（在位一二一八～一二三八年）によって六二二／一二二五年に創建され、当初はハディース学に専心す

る人々のための施設であったが、のちにシャーフィイー派法学も対象となった。マクリーズィー Taqiyy al-Dīn al-Maqrīzī（七六六～八四五／一三六四～一四四二年）の『エジプト地誌 *al-Mawāʿiẓ waʾl-Iʿtibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ waʾl-Āthār*』では、一五世紀のカーミリーヤ学院は、八〇六／一四〇三―〇四年以降の食糧不足とそれに続くペスト禍（「諸事件と諸試練」）によって他のマドラサと同様に荒廃したことが伝えられる。マクリーズィーによれば、「このマドラサの教授職は、見た目以外は人間には属さず、発話以外では家畜にも劣るような若輩者が任命されており、マドラサで教鞭が執られることのない状況がしばらく続いていたために、そこでの講義については［人々に］忘れられてしまったか、ほぼ忘れられている」という(46)。

カーミリーヤ学院は「ハディースの館 Dār al-Ḥadīth」として史上二番目に古い、ハディース研究の拠点施設であったが、一五世紀初頭以降、学界における影響力を低下させたことがマクリーズィーの記述に示される。だが事件当時のサハーウィーは四四歳頃で、すでに「ハディースのシャイフ shaykh al-Ḥadīth」と称されるなど、ハディース学者としての名声を築いており、マクリーズィーの語る不適格者とは言い難い。また、同学院のハディース学教授の就任をめぐり、王朝の有力者を巻き込んだ争いに発展したことは、往時の地位を回復したとは断定できないまでも、任官運動の対象となる有力施設であったといえるだろう。

次にこの事件に関わった人物を整理しよう。サハーウィーの任命をめぐりスルターンから確約を取りつけた人物として、八六六／一四六一年以降、文書行政職の責任者であったイブン・ムズヒルが挙げられる。そしてサハーウィーの学識を保証することでこれを追認したのが、後のハナフィー派大カーディー・アムシャーティーであった。他方、サハーウィーの就任を阻止した勢力は、ムフタスィブのヤシュバク・アル＝ジャマーリー、スルターンの妻ファーティマの父であるイブン・ハーッス・バク、そしてビカーイーとその門下からなる一派であった。侍従長のタムルは一連の行為がスルターンの勅令に基づくものであると弁明したのみで、いずれの側に立ったかは、ここでは明かされていない。

ビカーイーを除く関係者としてまず重要なのは、スルターン最側近の官僚であった、イブン・ムズヒルである。サハーウィーは八七一／一四六七年、イブン・ムズヒル

の巡礼にメッカで帯同し、詳細な記録を残している。その後も彼の主催するマジュリス（学的会合 majlis）に出入りして交流を重ねつつ、彼がカイロ、メディナに創建したマドラサに居住するなどの便宜を受けた[47]。官職の任免権は最終的にはスルターンにあったが、当時のイブン・ムズヒルがその意思決定に多大なる影響を及ぼしていたことは、複数の史料記述から裏付けられる。一例を挙げれば、カーミリーヤ学院の事件からわずか半年後の八七六年ジュマーダー・アル＝ウーラー月／一四七一年一〇―一一月、ハンバル派大カーディーの任命に際し、イブン・ムズヒルは前任者の弟子であったサアディー Badr al-Dīn Muḥammad al-Sa'dī（九〇六／一四九七年没）の登用に向け、カーイトバーイに働きかけを行なった。イブン・イヤース Zayn（Shihāb）al-Dīn Muḥammad ibn Iyās（八五二～九三〇頃／一四四八～一五二四年頃）によれば、若輩であったサアディーの抜擢は同派ウラマーの反発を招いたが、カーイトバーイはイブン・ムズヒルの意向を重んじた[48]。したがって、イブン・ムズヒルによる執り成しを主張するサハーウィーは、自身の任命に対して強い確信をもっていたに違いない。

確かにヒジュラ暦八七〇年代後半のイブン・ムズヒルの権勢は、反対派、すなわち前任者の息子を支持した有力マムルーク、ヤシュバクを凌ぐものであった。事件から一年後の八七七年ラビーウ・アッ＝サーニー月／一四七二年八月、カーイトバーイはヤシュバクを廃し、イブン・ムズヒルの息子であるバドル・アッ＝ディーン Badr al-Dīn Muḥammad（八六〇～九一〇／一四五五―五六～一五〇四年）をムフタスィブに任命した。サイラフィーによれば、任命の当日、カーイトバーイはイブン・ムズヒルに対して、息子に関する苦情が寄せられていることを伝えながらも、バドル・アッ＝ディーンのための賜衣が準備されたという[49]。カーイトバーイは行政官としてのバドル・アッ＝ディーンの評判が芳しくないことを把握していながら、ヤシュバクの職を彼に与えたのである。

このようなサハーウィーの支持者をめぐる「不都合な」エピソードは、彼の人物、歴史記述のいずれにおいても語られることはない。『輝く光』のイブン・ムズヒル伝では、彼の政治的影響力や任免に対する発言権は、卓越した指導力に対するスルターンの信頼の表れとして描かれている。バドル・アッ＝ディーンがムフタスィブの職にあった八九一年シャウワール月／一四八六年九―一〇月には、小麦、パン、家禽の価格が上昇し、スル

ターンのマムルークとそれに同調する歩兵たちが暴徒化した。集団はブーラークのムズヒル邸に向かい、銃やその他の武具で襲撃を試みたが、サハーウィーはこの混乱さえも、「その父の心根の美しさにより、至高なる神は彼ら（暴徒）を妨げた」と美化しているのである。(50)

では、『輝く光』に伝記が収録されている、ビカーイーの弟子たちはどうか。サハーウィーによれば、カルキーリーはエルサレム出身で、その父、祖父も学者であった。エルサレムでは当時逗留していたサハーウィーのほか、ジャマール・アッ＝ディーン・イブン・ジャマーア Jamāl al-Dīn ibn Jamā'a（七八〇～八六五／一三七九～一四六一年）やタキー・アッ＝ディーン・アル＝カルカシャンディー Taqiyy al-Dīn al-Qalqashandī（七八三～八六七／一三八二～一四六三年）ら当地の有力学者に学んだ。カイロに移住した後にはイブン・カースィム Shams al-Dīn Muḥammad ibn Qāsim al-Maqsī（八一七頃～八九三／一四一四―一五頃～一四八八年）、ファフル・アッ＝ディーン・アル＝マクスィー Fakhr al-Dīn 'Uthmān al-Maqsī（八一八～八七七／一四一六～一四七二年）らに師事したほか、八七四年ラジャブ月／一四七〇年一月にはサハーウィーのマジュリスにも出席し、彼の著作から学んだとある。(51)

したがって、カルキーリーは事件の前年まではサハーウィーとも師弟関係にあったが、その後、ビカーイーとの関係を深めるようになったことで、両者が決別した経緯が記される。カルキーリーとの交流を契機に「彼（ビカーイー）の堕落は増し、ムスリムたちに彼の害と頑迷さが戻ってきた」。そして「特に誠実さで知られる人々に対する彼（カルキーリー）の大胆さが徐々に知られ」、「まもなく、あらゆる醜いことを公然と話すようになった」とサハーウィーは述べる。

さらにサハーウィーは、カルキーリーの伝記において、彼がビカーイーとの親交をもったことで、それまで懇意にしていたカイロの有力学者であるイブン・カースィムとも袂を分かつ様子を描写している。イブン・カースィムは、ヒジュラ暦八七一年のイブン・ムズヒルの巡礼に同行し、のちに彼がカイロに設立したマドラサでタサウウフの教授に任命され、息子バドル・アッ＝ディーンの「教育係」となるなど、(52)イブン・ムズヒルの信任は厚かった。そこでイブン・カースィムの助力のもと、カルキーリーは自らが作成した一篇の詩をイブン・ムズヒルのマジュリスで披露する機会を与えられたが、その内容

をめぐり、師であるイブン・カースィムと争うようになったという。[53]

さらにサハーウィーは、ウラマー・コミュニティ内におけるカルキーリーの評判を落とした事件として、同じくカルキーリーと親交のあった、アブドゥル＝バッル・イブン・アッ＝シフナに対するキッサ（訴状 qissa）の提出を挙げる。[54] この事件についてはイブン・イヤースがより詳しい説明を残しており、それによれば八七九年ラジャブ月／一四七四年一一―一二月、カルキーリーは、アブドゥル＝バッルが小姓らに命じてカルキーリーを殴打したことを不服としてキッサを提出した。同時に彼はアブドゥル＝バッルのクルアーン読誦における誤謬を指摘したが、クルアーン読誦のシャイフたちはむしろアブドゥル＝バッルの正しさを証明したという。[55]

サハーウィーはカルキーリーの伝記を総括するにあたり、「彼の在り方はよく知られていた。おそらく彼は嘘を身に着け、自身の美点を示すことによって自らを偽っていた。その結果、理性の貧弱な一部の人々、つまりは一部の従者や、その他の卑劣な金持ちたちのような、彼についても理性ある事柄についても理解できない人々のもとで、［自身の主張を］喧伝していたのである」と評している。

イブン・ラウクについては、サハーウィーの伝記記述によれば、カイロ出身でビカーイーを含む著名な学者らに学び、頭角を現したという。だが「彼は性急で、引用や証言の内容をよく精査しなかった」ため、師であるイブン・カースィムを当惑させ、また引用を自作のものと詐称することもあった。[56] そのため、イブン・カースィムからは講義への出席を禁じられ、他の師たちからも嫌悪されるなかで、唯一彼を激励したのがビカーイーであったという。

イブン・ラウクとカルキーリーの伝記をめぐっては、その「大胆さ」や「偽り」によってかつての師と決裂し、ビカーイーとの交流を深めていったという共通の描写がなされている。注目されるのは、サハーウィーのほか、彼らと決別・対立したウラマーとして挙げられているイブン・カースィム及びシフナ家も、ムズヒル家と近しい間柄だったという点である。イブン・ムズヒルはアブドゥル＝バッルの父ムヒッブ・アッ＝ディーンに対し、ヒジュラ暦八七一年の巡礼時に文書庁長官職の代理を委ねており、[57] イブン・カースィムと同じくアブドゥル＝バッルも、のちにムズヒリーヤ学院のハディース学教授を務

めている。[58] 他方、ビカーイーはイブン・ムズヒルに対して否定的な記述を残した唯一の同時代ウラマーであったが、[59] その後困窮したビカーイーは、前述の通りイブン・ムズヒルにパトロネージを求めている。[60] サハーウィーが、彼の伝記においてその書簡の全文を掲載したことは、一種の報復とみることもできよう。

（三）『輝く光』が伝えるウラマーのコネクティビティ

『輝く光』が編纂された一五世紀末、大カーディーや主要マドラサの教授職を含めた要職には、財政政策の一環として売官制が敷かれていたが、その前提となるのは縁故主義に基づく推薦（執り成し）であった。[61] それゆえに、ウラマーにとって、師弟関係や婚姻によって拡張・強化された人的紐帯に依拠しつつ、有力者のパトロネージを獲得することが社会的栄達の鍵を握っていた。[62]

サハーウィーの教授職就任を、前任者の子息とその支持者が妨害したカーミリーヤ学院の事件は、マムルーク朝末期における任官運動の一例として捉えることができよう。そこにおいて観察されるのは以下二つの側面である。一つは各派閥の顔触れである。サハーウィー支持派には学者のほか、彼のパトロンでもあった有力官僚が含まれ、前任者の息子を支持した集団にはマムルークとアウラード・アン＝ナース、そしてライバル関係にあった学者とその弟子筋からなる人々がいた。サイラフィーの記述には、両陣営の意図、すなわち当該職の獲得がいかなる利益をもたらすかに関する言及はない。だが、要職の任命が推薦制を基軸としており、またその斡旋によって得られる報酬が巨額であったことを考慮すると、[63] 自身の影響下にあるウラマーを重要ポストに配置することが権力の安定化につながったことは疑いなく、武官・文民を問わず、利害を共有する社会上層の有力者が協働していた実態がみえる。

第二は、スルターンがこの両派の間で揺れ動いているという点である。サイラフィーの叙述からは、サハーウィーの任命は有力官僚の口添えによって内定したものの、直後にそれを取り消す勅令が出されたことが分かる。また、二派に分かれた集団が各々の主張を展開して再裁定を求めたことは、任免に対するスルターンの意思決定は絶対ではなく、覆る可能性が十分にあったことを示している。スルターンは任命の最終決定者ではあるものの、そのプロセスには利害や学統で結びついた党派的な集団の意向が相当に影響していたといえるだろう。

『輝く光』に収載されたサハーウィーの自伝は、彼の経歴以上に学者としての影響力に力点が置かれている。そしてその「汚点」ともなり得るカーミリーヤ学院での顛末については、前任者の息子の伝記において簒奪された旨を記すにとどめ、多くを語らない[64]。就任を妨害したビカーイーとその弟子筋の伝記においても、事件については沈黙を貫くが、彼らの「悪評」をめぐっては極めて饒舌である。

同様に興味深い点として、「悪評」の対象となってしかるべき、マムルークのヤシュバクの伝記では、私財庁長官（nāẓir al-khāṣṣ）やムフタスィブを歴任したこと、彼の行政手腕や学問に対する造詣がごく簡潔に述べられるのみで、事件の記述も「悪評」も見当たらない。そもそもヤシュバクの政権内における地位に比して、記述自体が希薄である[65]。イブン・ハーッス・バクに至っては、『輝く光』に伝記そのものが収録されていない。ナースィル・ムハンマド時代から続く後者の一族からは、スルターン・イーナールの妻ザイナブ Zaynab（八八四／一四七九―八〇年没）[66]をはじめ、高位軍人の配偶者を輩出しており、彼自身もアウラード・アン＝ナースの有力者であり、何より現スルターンの正妻（khāwand al-kubrā）の父であった[67]。軍人や軍人層出身者の伝記をめぐっては、今後より詳細な検討が必要になるが、総じて『輝く光』の人選や情報量は、同時代社会を俯瞰的に捉えたうえでの重要性や影響力を正確に反映しているとみなすことはできない。

したがって、ビカーイー、そしてサハーウィー自身を含む、『輝く光』におけるウラマーの記述は、史実としての記録というよりも、人名録というフォーマットを用いて、サハーウィーがムスリム共同体の記憶として残そうとしたウラマー像に置き換えられたものであることを前提に分析すべきであろう。カーミリーヤ学院の事件やイブン・ムズヒルへの書簡に示されるように、サハーウィーとビカーイーの間には職の獲得やパトロネージをめぐり、様々な禍根があったことは容易に想像される。また、イブン・アル＝ファーリド論争の急先鋒であったビカーイーが、サハーウィー以外のウラマーと対立関係にあったことも確かであろう[68]。だがビカーイーの存在を無視して記録から排除するには、その功績や影響力が多大であったことは、『輝く光』に彼の名が繰り返し言及されることからもうかがわれる。そのため、ビカーイーとその学統を受け継ぐ弟子筋に対する記述は、人名録の体

裁を取りながらも、他に例をみないほど峻烈なものとなった。

このように、明らかにウラマーのコミュニティからの排除を目的として挿入された伝記は、スタンダードな人名録というよりも、むしろハディース批判（al-jarḥ wa'l-ta'dīl）から生まれた「弱き者たちの書 Kutub al-ḍu'afā'」の伝統、すなわちハディース伝承において、信頼性の「弱い」人物に関する評伝に類似する性質を帯びている(69)。人名録の伝える情報が、イスナードという世紀を超えて参照され続ける共同体のレガシーを基盤とする以上、『輝く光』にみえるウラマーの「悪評」は、依拠すべきでない人物、絶やすべき学統に対する次世代への警告なのであり、同時代の社会及びその構成員をどのように記憶すべきかを定義付ける試みでもあるといえるだろう。

四　むすびにかえて―伝記編纂の意図を探る

これまでも指摘されてきたように、人名録を編纂する行為が、ハディース学上の必要性に端を発していることは疑いない。だが、一五世紀の人名録と年代記の記述を照合することで、静的な定型情報の合間に、人と人との動的な正負のつながりが浮かび上がる。むろん、一五世紀がアラビア語文献学的に充実した時代の一つであり、幸運にも、個々人をめぐる記述量が豊富なこともあるだろうが、学者同士の競争が苛烈化したという社会的背景を見過ごすことはできない。かつて同門であっても、神学論争のみならず、ポストやパトロネージの獲得においても、異なる集団に属するウラマーは、必然的に競合する立場に置かれた。人的つながりの獲得がウラマーとしての栄達の戦略であった時代に残された人を伝える記述からは、生き残るためのコネクティビティ構築に向けたダイナミクスが垣間見える。

『輝く光』に収録された文民エリートの経歴を概観したピトリーは、サハーウィーの人物描写が客観性に欠けることを指摘しつつも、「歪曲する理由がない」ため、事実情報は信頼に足るものであると評価する(70)。だが仮に示される年代や経歴が事実であっても、人名録にみえる「悪評」、そしてカーミリーヤ学院の事件をめぐる記述が示すのは、叙述史料の解釈において、何が記されているかと同程度に、何を記さないかという問題にも十分に目配りしなければならないという点である。人物情報の記録においては、著者にとっての見せたいストーリーや、

残したい関係性は何かという観点から、戦略的な変換作業が介在しているとも言い換えられる。人的紐帯が重要な社会資本と捉えられる時代に記された「ウラマー・データベース」としての人名録には、その編纂者が共同体の記憶として残したい情報が取捨選択され、また改編されたうえで記録されているのではないだろうか。

社会上層部のつながりの一大記録である人名録は、著者自身とその学統に連なる人々の学者としての価値を後代に伝えるための重要な手段とみなすこともできるだろう。人名録にみえる「悪評」は、学説や学統の主導権をめぐるウラマー間の対立にとどまらず、官僚、マムルーク、さらにはスルターンを含めた同時代社会上層部の権力闘争という、より大きなストーリーのなかで捉えるべき問題を含んでいる。人名録が、人が人を伝える史料である以上、それに依拠したプロソポグラフィーにおいては、同時代の社会的文脈や著者自身の位置取り、叙述における意図を複合的に評価する必要がある。サハーウィーは、ハディース学から生まれた人名録編纂の伝統のなかに、自身の学者としての社会資本を記録することで、未来のイスラーム社会に向けた記憶とすることを試みたのである。

【謝辞】

本研究は、科学研究費助成事業・学術変革領域研究（A）「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築：世界の分断をのりこえる戦略知の創造」公募研究「一四～一六世紀アラブ都市エリート間の名目的コネクティビティの可視化分析」（課題番号：23H03928）及び若手研究「マムルーク朝後期人名録のデジタル解析に基づく文民エリートの関係構築」（課題番号：23K12288）に基づく成果の一部である。

【略号】

Badā'i' Ibn Iyās, *Badā'i' al-Zuhūr fī Waqā'i' al-Duhūr*, 6 vols. Cairo: Dār al-Kutub wa'l-Wathāiq al-Qawmiyya bi'l-Qāhira, 2008.

Ḍaw' al-Sakhāwī, *al-Ḍaw' al-Lāmi' li'l-Ahl al-Qarn al-Tāsi'*, 12 vols. Cairo: Maktabat al-Quds, 1935–1937.

Dhayl Raf' al-Sakhāwī, *al-Dhayl 'alā Raf' al-Iṣr aw Bughyat al-'Ulamā' wa'l-Ruwāh*, Cairo: al-Hay'a al-Miṣriyya al-

‘Āmma li’l-Kitāb, 2000.

Inbā’ al-Haṣr

al-Ṣayrafī, *Inbā’ al-Haṣr bi-Abnā’ al-‘Aṣr*, Cairo: al-Hay’a al-Miṣriyya al-‘Āmma li’l-Kitāb, 2002.

Iẓhār

al-Biqā‘ī, *Iẓhār al-‘Aṣr li-Asrār Ahl al-‘Aṣr: Ta’rīkh al-Biqā‘ī*, 3 vols., Giza: Hajar li’l-Ṭibā‘a wa’l-Nashr wa’l-Tawzī‘ wa’l-I‘lān, 1992–1993.

Khiṭaṭ

al-Maqrīzī, *al-Mawā‘iẓ wa’l-I‘tibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wa’l-Āthār*, 4vols., Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmiyya, 1998.

Nayl

al-Malaṭī, *Nayl al-Amal fī Dhayl al-Duwal*, 9 vols., Beirut and Sayda: al-Maktaba al-‘Aṣriyya, 2002.

Wajīz

al-Sakhāwī, *Wajīz al-Kalām fī al-Dhayl ‘alā Duwal al-Islām*, 4 vols., Beirut: Mu’assasat al-Risāla, 1995.

Encyclopaedia of Islam, THREE

Kate Fleet, *et al.* (eds.), *Encyclopaedia of Islam, THREE*, Leiden: Brill, 2007–. (online)

註

（1）　アラブ・イスラーム地域における歴史記述の概略は、佐藤次高「歴史を伝える」林佳世子・桝屋友子（編）『記録と表象：史料が語るイスラーム世界』、東京大学出版会、二〇〇五年、五六〜七七頁を参照せよ。

（2）　マムルーク朝期の著名知識人に関するプロソポグラフィー的研究は充実している（以下に挙げるウラマーのうち、本稿で言及する人物の転写、生没年は該当箇所を参照されたい）。例えばアイニー Badr al-Dīn al-‘Aynī（七六二〜八五五／一三六〇〜一四五一年）（中町信孝「バドルッディーン・アイニーの学問的キャリア：マムルーク朝ウラマーの一事例」『甲南大学紀要文学編』一五九号、二〇〇九年、五一〜七一頁；同「バドルッディーン・アイニーの職業的キャリア：マムルーク朝ウラマーの一事例（二）」『甲南大学紀要文学編』一六四号、二〇一四年、二三七〜二四八頁）、イブン・ハジャル・アル＝アスカラーニー（Sabri Khalid Kawash, *Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī (1372–1449 a.d.): A Study of the Background, Education, and Career of a ‘Ālim in Egypt*, Princeton: Princeton University, 1969）、マクリーズィー（Frédéric Bauden, “Taqī al-Dīn Aḥmad ibn ‘Alī al-Maqrīzī”, in Alex Mallett (ed.), *Medieval Muslim Historians and the Franks in the Levant*, Leiden: Brill, 2014, pp. 161–200）、ビカーイー（Kenneth Goudie, “How to Make it in Cairo: The Early Career of Burhān al-Dīn al-Biqā‘ī”, *Mamlūk Studies Review* 23, 2020, pp. 203–230）、イブン・トゥー

ルーン Shams al-Dīn Ibn Ṭūlūn（八八〇～九五三／一四七三～一五四六年）（苗村卓哉「一五―一六世紀ダマスクスにおけるウラマーの学習過程：イブン・トゥールーンの事例を中心に」山本正身（編）『アジアにおける「知の伝達」の伝統と系譜』、慶應義塾大学出版会、二〇一二年、二一五～二六五頁）など。家系としての研究は、ジャマーア家 Jamāʿa（Kamal Salibi, "The Banū Jamāʿa: A Dynasty of Shāfiʿite Jurists in the Mamluk Period", *Studia Islamica* 9, 1958, pp. 97–109）、ブルキーニー家 al-Bulqīnī 及びシフナ家 al-Shiḥna（伊藤隆郎「一四世紀末―一六世紀初頭エジプトの大カーディーとその有力家系」『史林』七九／三号、一九九六年、三一五～三五九頁）、ダマスクスのカーディー・アジュルーン家 Qāḍī ʿAjlūn（Torsten Wollina, "The Banu Qadi ʿAjlun: Family or Dynasty?", *DYNTRAN Working Papers* 19, 2016, online edition http://dyntran.hypotheses.org/1623）などがある。

（3） 中世アラビア語伝記記述の実例については、谷口淳一「人物を伝える」林佳世子・桝屋友子（編）『記録と表象：史料が語るイスラーム世界』、東京大学出版会、二〇〇五年、一三二～一三六頁に挙げられている。

（4） 谷口「人物を伝える」、一三六頁。

（5） ピトリーはサハーウィーが正確性を欠く当時のハディース研究に危機感を覚えたことを、『輝く光』の執筆動機として挙げている（Carl F. Petry, *The Civilian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*, Princeton: Princeton University Press, 1981, p. 9）。

（6） 谷口「人物を伝える」、一一四～一一八頁及び森山央朗「預言者ムハンマドを「継いだ」学者たち：一〇―一三世紀のムスリム社会の宗教知識人研究」『基督教研究』七六／一号、二〇一四年、一三頁。

（7） 磯貝真澄「人名録出版に埋め込まれた信頼」イスラーム信頼学（編）『イスラーム信頼学ニュースレター』三号、二〇一三年、一八～一九頁。

（8） Goudie, "How to Make it in Cairo", p. 206.

（9） *Daw'*, vol. 8, pp. 2–32.

（10） サハーウィーの弟子アブドゥル＝アズィーズ・イブン・ファフド ʿIzz al-Dīn ʿAbd al-ʿAzīz ibn Fahd（八五〇～九二〇／一四四七～一五一四―一五年）の手になる写本（図1 『輝く光』ビカーイー伝の冒頭部分）が一旦の完成をみたのは、ヒジュラ暦八九七／一四九一―九二年である。

（11） マムルーク朝期のヒストリオグラフィーにおいて、伊藤隆郎氏は、「歴史家の間に何らかの党派ないしは派閥があったことを想定し、それが影響を及ぼしているとも考えられるだろう。そうであれば、史料そのものを対象としたテキスト・クリティークだけでなく、著者の経歴や人間関係を明らかにすることも重要である」と指摘する（伊藤隆郎「サハーウィーの参照した歴史関連文献」『西南アジア研究』四七号、一九九七年、三一頁）。

（12） Walid A. Saleh, "A Fifteenth-Century Muslim Hebraist: Al-Biqāʿī and His Defense of Using the Bible to Interpret the Qurʾān", *Speculum* 83/3, 2008, pp. 635–636; idem,

art. “al-Biqāʿī”, in *Encyclopaedia of Islam, THREE*.

（13） Yehoshua Frenkel, “Al-Biqāʿī’s Naval War-Report”, in Stephan Conermann (ed.), *History and Society during the Mamluk Period: Studies of the Annemarie Schimmel Research College I*, Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht, 2014, pp. 9–20.

（14） Li Guo, “Al-Biqāʿī’s Chronicle: A Fifteenth Century Learned Man’s Reflection on His Time and World”, in Hugh Kennedy (ed.), *The Historiography of Islamic Egypt, c. 950–1800*, Leiden: Brill, 2001, pp. 121–148.

（15） Li Guo, “Al-Biqāʿī’s Chronicle”, p. 122.

（16） Goudie, “How to Make it in Cairo”, pp. 221–223.

（17） フォリオ番号は左右・見開きで付されている。

（18） *Ḍaw’*, vol. 1, pp. 101–111.

（19） *Ḍaw’*, vol. 1, p. 101.

（20） 「アルド（‘arḍ）」のイジャーザは，幼少期に授与され，ウラマーとしての通過儀礼的な位置づけにあった（苗村卓哉「一五―一六世紀東アラブ世界におけるアルド：イブン・トゥールーンの自伝・名士伝記集を中心に」『オリエント』五三／一号，二〇一〇年，三一―五七頁）。

（21） *Ḍaw’*, vol. 1, pp. 103–104.

（22） *Ḍaw’*, vol. 1, p. 102.

（23） *Ḍaw’*, vol. 1, p. 103.

（24） *Ibid*.

（25） *Ibid*.

（26） *Ḍaw’*, vol. 1, p. 104.

（27） ビカーイーがカイロを去ったヒジュラ暦八八〇年から没する八五年までの間に記されたと考えられる（Erina Ota-Tsukada, “Formation of the Ideal Bureaucrat Image and Patronage in the Late Mamlūk Period: Zayn al-Dīn Ibn Muzhir and ‘Ulamā’”, *Al-Madaniyya: Keio Bulletin of Middle Eastern and Asian Urban History* 1, 2021, p. 45）。

（28） *Ḍaw’*, vol. 1, p. 110.

（29） ビカーイーの言及数は，The Open Islamicate Texts Initiative が公開する『輝く光』のデジタルテキスト（0902Sakhawi.DawLamic.JK003608-ara1.mARkdown-Simple）を基に，テキスト分析ツールの Voyant tools（https://voyant-tools.org/）を用いて機械的に割り出した。内訳は “al-Biqāʿī” が三九四回，“waʾl-Biqāʿī” が六四回であり，合計数は当時のクルアーン読誦学の権威イブン・アル＝ジャザリー Ibn al-Jazarī（七五一―八三三／一三五〇―一四二九年）の四五四回（al-Jazarī）よりも多い。ただし，当該テキストは誤字脱字のほか，ページ単位での脱落も確認されるなど不完全であるため，現在科研費学術変革領域研究（A）「イスラーム的コネクティビティにみる信頼構築」C01「デジタル・ヒューマニティーズ的手法によるコネクティビティ分析」班内「サハーウィー・プロジェクト（熊倉和歌子氏（慶應義塾大学）・伊藤隆郎氏（神戸大学）・太田（塚田）絵里奈）」が中心となり修正版を作成している。そのため，ここに述べた言及回数は今後変動する可能性があるが，サハーウィーのビカーイーに対する関心を示すには十分であろう。

(30) ビカーイーはイブン・ハジャルの「ムラーズィムmulāzim」（信奉者・弟子）を自称し（Goudie, “How to Make it in Cairo”, p. 212）、サハーウィーは著述においてイブン・ハジャルを「我々の師 shaykh-nā」という固有の表現で示している。

(31) *Inbā' al-Haṣr*, p. 508.

(32) Goudie, “How to Make it in Cairo”, p. 213.

(33) この論文は現存していない（Saleh, “A Fifteenth-Century Muslim Hebraist”, p. 638, note 42）。

(34) イブン・アル＝ファーリドをめぐる論争において、ビカーイーはイブン・アル＝ファーリドの「存在一性論」を異端として退けた。だが、擁護派のウラマーから多くの反論が寄せられ、サハーウィーもその一人であった。スルタ ーン・カーイトバーイがイブン・アル＝ファーリド支持を表明したことで帰趨は定まった。この論争の概要は、Thomas E. Homerin, *From Arab Poet to Muslim Saint: Ibn al-Fāriḍ, His Verse, and His Shrine*, Columbia: University of South Carolina Press, 1994, chapter 3; 東長靖『イスラームとスーフィズム：神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会、二〇一三年、二〇五―二〇九頁を見よ。

(35) *Ḍaw'*, vol. 9, pp. 295–305（ムヒッブ・アッ＝ディーン）; vol. 4, pp. 33–35（アブドゥル＝バッル）; vol. 9, pp. 93–95（イブン・イマーム・アル＝カーミリーヤ）. イブン・アッ＝シフナ父子の経歴については、伊藤「一四世紀末―一六世紀初頭エジプトの大カーディー」、三四三―三四五頁を見よ。

(36) *Inbā' al-Haṣr*, pp. 283–285.

(37) *Ḍaw'*, vol. 9, pp. 93–95; *Nayl*, vol. 6, p. 413. なおサハーウィーは彼の没年をヒジュラ暦八六四年と記すが、八七四年の誤りである。

(38) 彼の生涯については不明な点が多いが、死亡記事（*Badā'i'*, vol. 3, p. 302）によれば、アウラード・アン＝ナース（マムルークの子孫）の名士（a'yān）に属していたとある。

(39) *Ḍaw'*, vol. 3, pp. 84–85. サハーウィーは彼の名を「ジャウハル」と記すが、サイラフィーの年代記においては「アンバル」と言及される。

(40) ファーティマの生涯及び管理財産については、Carl F. Petry, “Class Solidarity versus Gender Gain: Women as Custodians of Property in Later Medieval Egypt”, in Nikki R. Keddie and Beth Baron (eds.), *Women in Middle Eastern History: Shifting Boundaries in Sex and Gender*, New Haven and London: Yale University Press, 1993, pp. 134–136 を見よ。

(41) *Badā'i'*, vol. 3, p. 107; *Ḍaw'*, vol. 3, p. 42.

(42) 『輝く光』にみえるアムシャーティーの伝記（*Ḍaw'*, vol. 6, pp. 301–304）には、サハーウィーが彼と親しかったことが示唆されている。アムシャーティーはのちにムヒッブ・アッ＝ディーン・イブン・アッ＝シフナに代わり、ハナフィー派大カーディーに就任した（*Nayl*, vol. 7, p. 48）。

（43）彼の伝記は *Ḍaw'*, vol. 7. pp. 42–43 を見よ。

（44）彼の生年は校訂本（*Ḍaw'*, vol. 7. p. 89）にはヒジュラ暦八〇五年とあるが、写本（Ma'had al-Makhṭūṭāt al-'Arabiyya, Tārīkh 1119/3, fol. 144）では八五〇年である。なお *Badā'i'* の索引においては校訂者によって Rawak と転写されているが、本稿では Mark R. Cohen, "Jews in the Mamlūk Environment: The Crisis of 1442 (A Geniza Study)", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 47/3, 1984, p. 428 に言及される、彼の祖父と思われる人物と同一のニスバとして、コーエンの転写に従う。

（45）*Ḍaw'*, vol. 4, p. 144.

（46）al-Maqrīzī, *Khiṭaṭ*, vol. 4, p. 219. マクリーズィーの語る「諸事件と諸試練」は、長谷部史彦「一四世紀エジプト社会と異常気象・飢饉・疫病・人口激減」柴田三千雄他（編）、『歴史における自然』、岩波書店、一九八九年、五七七〜五八六頁を見よ。

（47）拙稿「ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルをめぐる「夢」：奇跡譚にみえる後期マムルーク朝有力官僚の人的コネクション」『史学』九〇／一号、二〇二一年、五七七頁。

（48）拙稿「ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルをめぐる「夢」」、六五頁。

（49）*Inbā' al-Haṣr*, p. 489.

（50）*Wajīz*, vol. 3, p. 971.

（51）*Ḍaw'*, vol. 7, p. 42.

（52）*Ḍaw'*, vol. 7, p. 198.

（53）*Ḍaw'*, vol. 7, p. 43.

（54）当該時期のキッサの実態は、長谷部史彦「ムフタスィブ批判のキッサについて」『オリエント』四四／一号、二〇〇一年、一六五〜一六八頁を参照せよ。

（55）*Badā'i'*, vol. 3, p. 101.

（56）*Ḍaw'*, vol. 7, p. 90.

（57）*Dhayl Raf'*, p. 481; 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚と聖地：ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルの巡礼とハラマインにおける慈善」『史学』八八／二号、二〇一九年、三八頁。

（58）*Ḍaw'*, vol. 4, pp. 33. ムズヒリーヤ学院の教職員はザイン・アッ＝ディーンと親密なウラマーによって占められていた（拙稿「後期マムルーク朝有力官僚と聖地」、三九頁）。

（59）Ota-Tsukada, "Formation of the Ideal Bureaucrat Image and Patronage", pp. 45–47.

（60）Ota-Tsukada, "Formation of the Ideal Bureaucrat Image and Patronage", pp. 49–52.

（61）Aḥmad 'Abd al-Rāziq Aḥmad, *Al-Badhl wa'l-Barṭala Zamana Salāṭīn al-Mamālīk: Dirāsa 'an al-Rishwa*, Cairo: al-Hay'a al-Miṣriyya al-'Āmma li'l-Kitāb, 1979; Bernadette Martel-Thoumian, "The Sale of Office and Its Economic Consequences during the Rule of the Last Circassians (872–922/1468–1516)", *Mamlūk Studies Review* 9/2, 2005, pp. 49–83; Toru Miura, "Administrative Networks

in the Mamlūk Period: Taxation, Legal Execution, and Bribery", in Tsugitaka Sato (ed.), *Islamic Urbanism in Human History: Political Power and Social Networks*, London: Kegan Paul International, 1997, pp. 39–76.

(62) 拙稿「ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルをめぐる「夢」」、六七頁。当該時期のウラマーの多くが、スルターンやアミールとの相互依存的関係にあった（Anne F. Broadbridge, "Academic Rivalry and the Patronage System in Fifteenth-Century Egypt: al-'Aynī, al-Maqrīzī, and Ibn Ḥajar al-'Asqalānī", *Mamlūk Studies Review* 3, 1999, p. 85）。

(63) 拙稿「後期マムルーク朝有力官僚の実像：ザイン・アッ＝ディーン・イブン・ムズヒルの家系と経歴」『史学』八三／二〜三号、二〇一四年、四七、五五〜五七頁。

(64) *Ḍaw'*, vol. 8, p. 31.

(65) *Ḍaw'*, vol. 10, p. 276.

(66) ザイナブの伝記は *Ḍaw'*, vol. 12, pp. 44–45 を見よ。なお彼女の伝記冒頭に、その兄弟ハリール Khalīl の伝記も収載されているとあるが、写本（Ma'had al-Makhṭūṭāt al-'Arabiyya, Tārikh 1119）、校訂本のいずれにも立項はない。

(67) 娘のファーティマも、『輝く光』のアウトラインがほぼ完成したヒジュラ暦八九七年ののちに没したためか、伝記は収録されていない。スルターンの妻でありながら同時代の叙述史料において彼女の存在を確認できるのは、転居、ヒジュラ暦八七九／一四七五年の巡礼、そして死亡記録という、わずか三例にとどまるという（Petry, "Class Solidarity versus Gender Gain", p. 134）。このような記述の不均衡性については、今後の検討課題としたい。

(68) たとえば、サイラフィーはビカーイーの死亡記事において、「大学者 'allāma」で「宗教と善を持ち合わせている」と評価しながらも、「その性質 akhlāq は悪しきものであった」と否定的に述べる（*Inbā' al-Hasr*, p. 508）。だが、サイラフィーの『獅子の通知』では、サハーウィー及びイブン・ムズヒルに対し、極めて好意的に記述されていることに注意する必要がある。

(69) 代表的な著作に、ジャアファル・アル＝ウカイリー Ja'far b. Muḥammad al-'Uqaylī（三三二／九三四年没）の『弱き者、打ち捨てられた者たちの書 *Kitāb al-ḍu'afā' wal-matrūkīn*』など（Pavel Pavlovitch, art. "Ḥadīth criticism", *Encyclopaedia of Islam, THREE*, "6. Kutub al-ḍu'afā'"）。

(70) Petry, *The Civilian Elite of Cairo*, p. 10.